



2020.10.16

心理的ビッドのテクニック

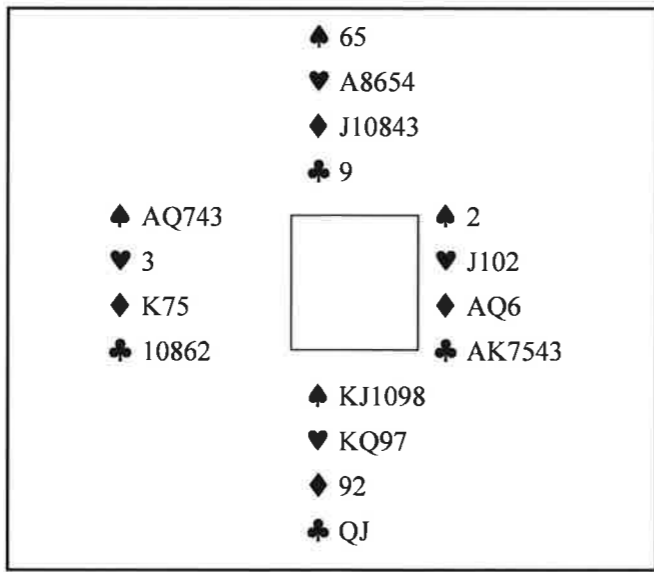
■強さでウソをつく

2020年9月13日の町田長月杯S T Fペア 1stセッションの11番ボードのN(私)はナイザールで♠65 ♥A8654 ♦J10843 ♣9を持っていました。ディーラーSのパートナーが1Sオープンをし、1NTレスポンスをすると

1S - (P) - 1NT - (2C)
2H - (3C) - ?

と進んできました。ここで何をビッドしますか? 6HCPしかありませんので、パスか3H位がある意味正しいビッドでしょう。しかしオポーネントはクラブがフィットしています。クラブで1、たぶんハートでは0、スペードでは1か2、ダイヤモンドでは1取られるでしょうから2H位しかできないでしょう。しかしオポーネントのクラブコントラクトになったとすると、ハートで1、クラブで0、ダイヤモンドでも0、スペードで1くらいしか取れない、つまり5Cを作られそうと推測します。だから4Hと強そうにビッドします。

4Hというビッドは、科学的ビッドの見地からは甚だしいオーバービッドでしょう。オポーネントに5Cが作られそうだと感じるならば、4Hと言って強そうに見せることで5Cビッドされるのを防ごうという意図です。実際4Hは3ダウン-150でしたが、5Cは6メーク620点、4Cに留まったペアもいましたがそれでも170点で、150点はセカンドトップでした。弱いのに強そうに見せることで、持つ強さを相手が見誤るように仕向けるのも1つのテクニックです。全部のハンドは右のようになっていました。確かにEWには6Cがコールドでした。到達していたペアはいませんでした。

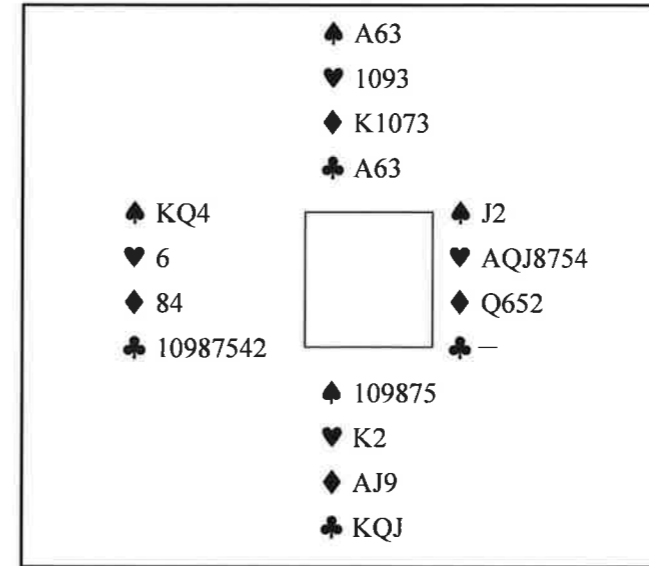


■オポーネントを誘い込む

同じ試合で3番ボードEにいて♠J2 ♥AQJ8754 ♦Q652 ♣-を持っていました。EWバルNSノンバルです。私の左ディーラーのSは1Sとオープンしました。パートナーパスで右のNは3Dと言います。意味を聞くと3枚サポートのリミットレイズ以上ですという説明がありました。ここで4Hとビッドしてみます。意図はバル関係からこちらの4Hに

は4Sと使いやすいシチュエーションであること、もちろんあわよくばメーク出来るかも知れないという意図です。

(1S) - P - (3D) - 4H
(4S) - P



となつてしまいました。♥6がリードされ♥Aを取り、♥4をリターンします。パートナーはディクレアラーの♥Kを♠4でラフし♣10を出します。ダミースモールをEは♠4でラフし、またハートを出すとパートナーは♠Qでオーバーラフしてまたクラブを出しますからEは♠Jでラフ出来、2ダウンしました。NSのペアはこのセッションで64%で1位のペアでした。EWの我々のペアは61%の3位でしたので、このボードでWが乾坤一擲ダブルをしていれば300点とって

このボードのコールドトップとなつていました。このボードはアベレージの結果でしたが、もし300点取れていたら我々に+2%、相手は-2%の差し引き4%となつて1位と3位が逆転していたところでした。

これら2つは心理的な戦法になり (Psychological Strategy)、今主流の科学的戦法に対比されるべきものです。もっとも極端な心理的ビッドはサイキックと呼ばれるものになります。つまりオープンできる強さがないのにオープンするとか、短いストでオープンしたりレスポンスしたりすることです。これの歴史は古く、ブリッジが始まったばかりのころから存在していました。現代ではあまりサイキックをする人がほとんど見当たらなくなっていますが、私はもう少しサイキックする人がいた方がブリッジの面白さが増すのではないかと考えています。